

NTT DATA

AWS Summit Japan2024

**NTTデータ流
AWSのDX最適活用例**

**～伴走型SREの
継続的改善の取り組み～**

2024年6月

田澤直輝

田澤 直輝

Japan AWS Top Engineer 2023

所属

株式会社NTTデータグループ

技術革新統括本部 システム技術本部

業務内容

クラウド案件での技術リード

多業種でのクラウドコンサルから開発、運用に従事

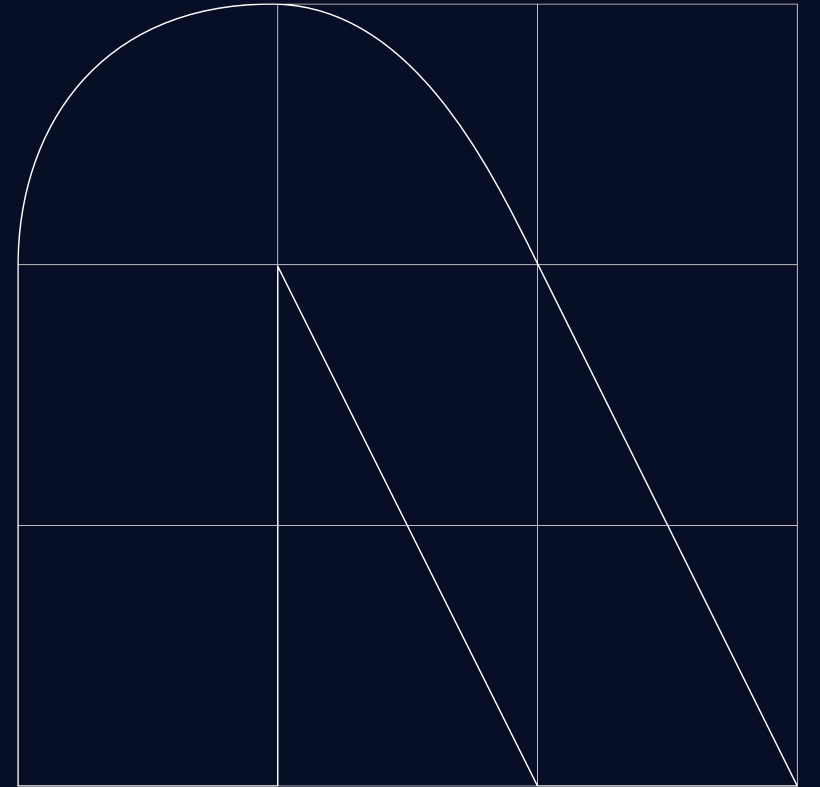
好きなAWSサービス

Amazon Elastic Container Service

Amazon EventBridge



組織の"クラウド共通基盤"

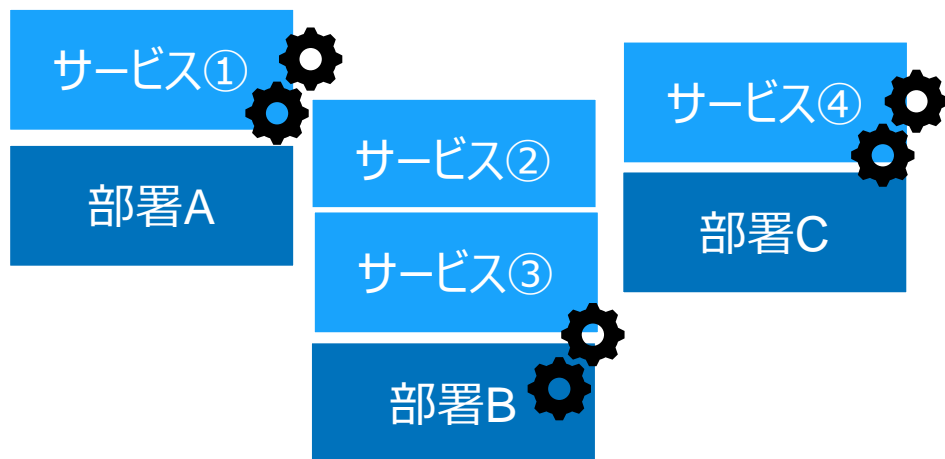


背景：サイロ化の解決策としての共通基盤

クラウド利用に関して組織内でのサイロ化を防ぐため、従来各社で共通基盤といったアプローチが取られてきた。

Step.1:各部署、各サービスごとのクラウド利用

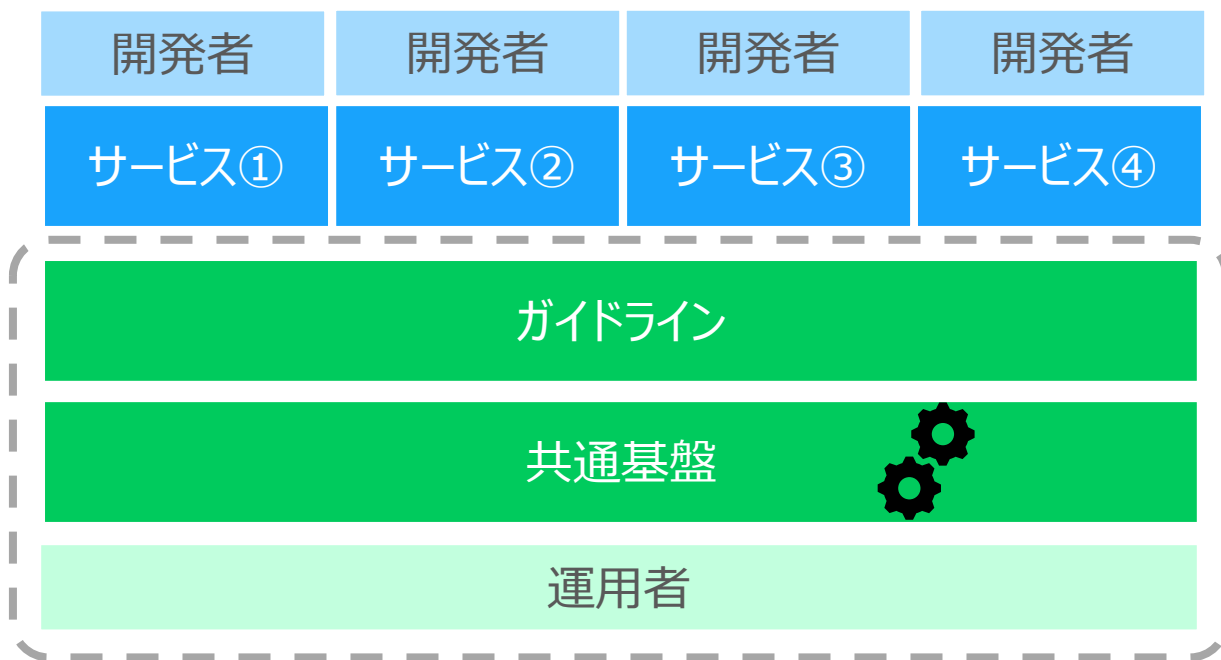
組織とサービスごとのサイロ化



- コスト：複数部署で類似機能の再発明により無駄なコスト増
- ガバナンス：対策不備な部署が発生

Step.2:CCoE設立、標準化、共通基盤構築

部署の垣根を超えて、組織内のサービスを全体最適化



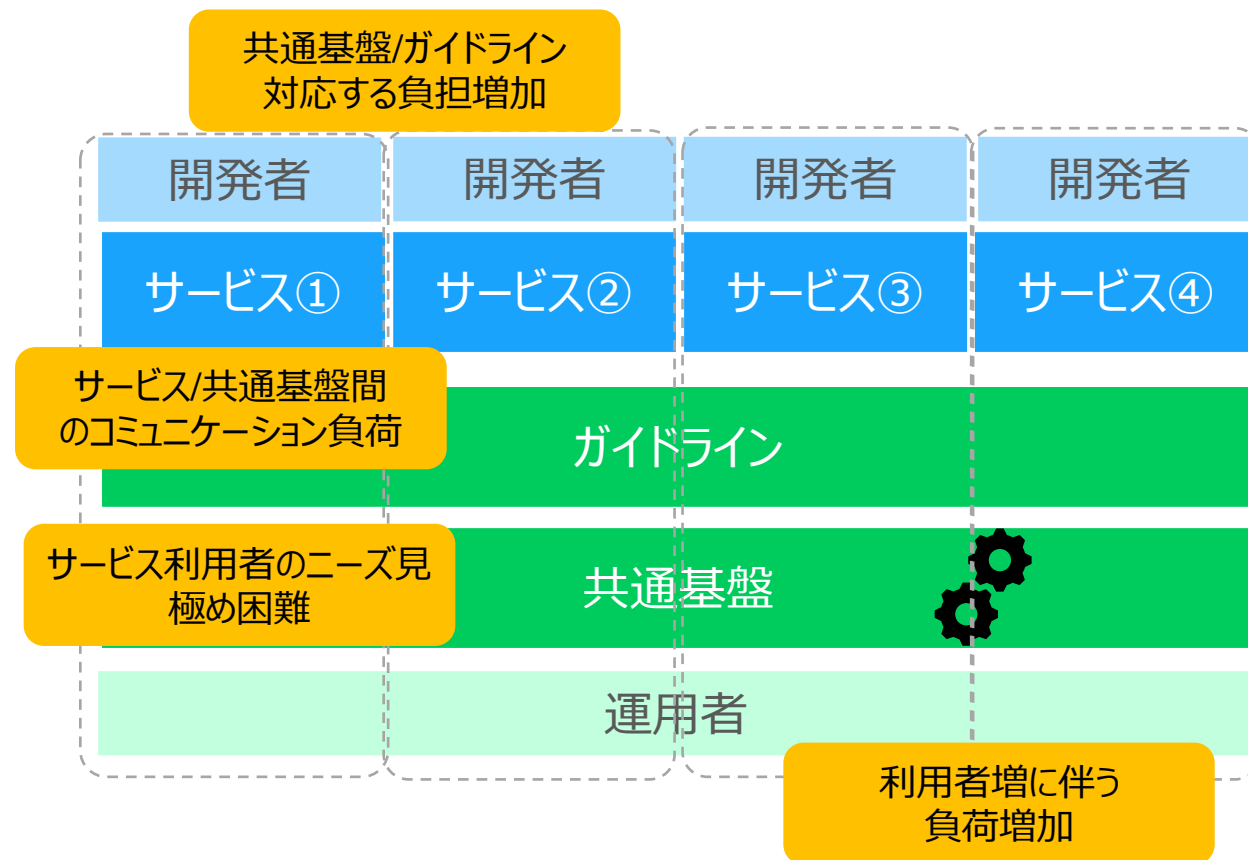
- コスト：共通基盤として類似機能を統合
- ガバナンス：ガードレール機能を提供、ガバナンスを効かせる

背景：サイロ化の解決策としての共通基盤

共通基盤の利用者である開発者やサービスとのギャップ。サービス開発におけるアジリティがあがらない。

サイロ化した組織の垣根とサービスとのギャップ

- 共通化の一方、実際のサービス(システム)に対して開発者/運用者/CCoEといった**サイロ化**が残る。
- サービスをリリースする上で、共通基盤と利用者間での申請や調整は発生。
- 共通基盤が先行した開発を進めていく一方で、実際に利用する**サービス開発者側の認知負荷Up**
- サービス数がスケールとともに**共通基盤の運用者の負荷もスケール**。



背景：プラットフォームエンジニアリングのアプローチ

目指したい姿に向けてどんなアプローチが求められるか。

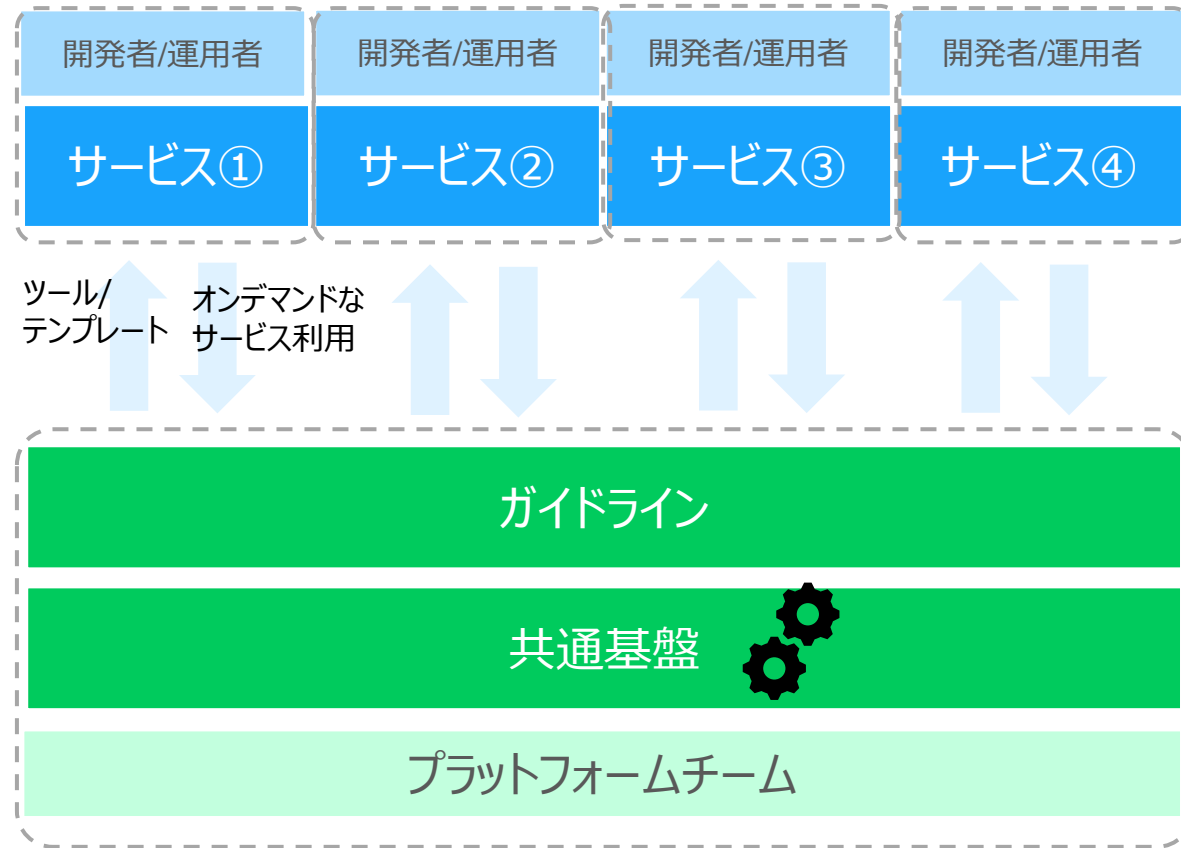
目指したい姿

- 開発者体験を重視して、負荷を軽減するためのプラットフォームを目指したい。
- サービスの開発チームが必要なときに必要な機能提供できればよい。(Ex:セルフサービス化)
- 開発者の負荷軽減のためのテンプレート/ツール提供。

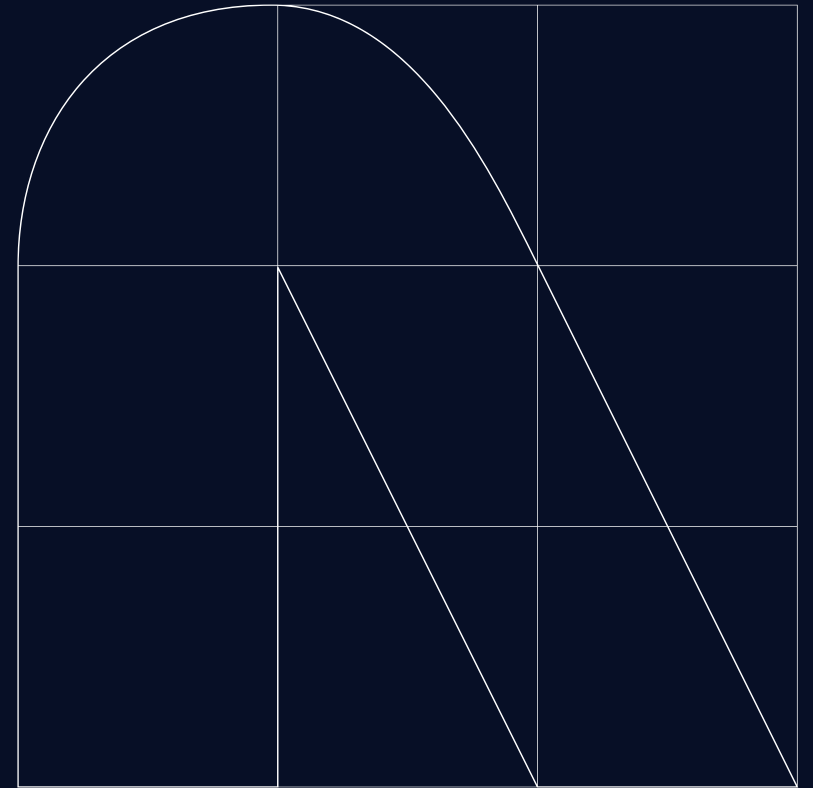
導入する上での課題感

一方で一足飛びに最終形を目指すのは難しい。

- サービス開発チームは完結したチームになっているか？
- プラットフォームチームはサービスや開発者のレベルやニーズを日々キャッチアップできるか？



NTT DATAのアプローチ

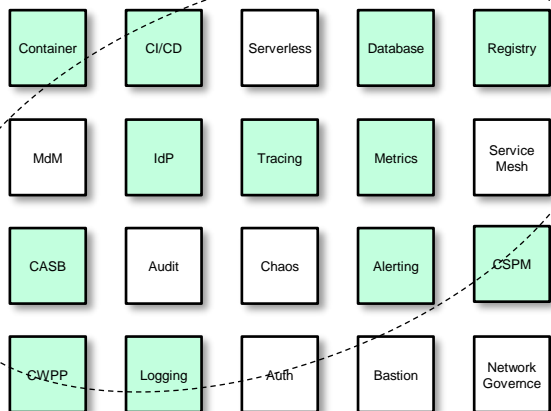


NTT DATAのアプローチ：ロードマップから組織に合わせた最適化

ロードマップからフェーズと組織や利用者特性に合わせてグラデーションを付けて最適化。

- 過去実績から、プラットフォームとして求められる機能やガイドのラインナップをロードマップとして整理。
- 利用する組織の業界や目指すゴールに合わせてロードマップを設定。

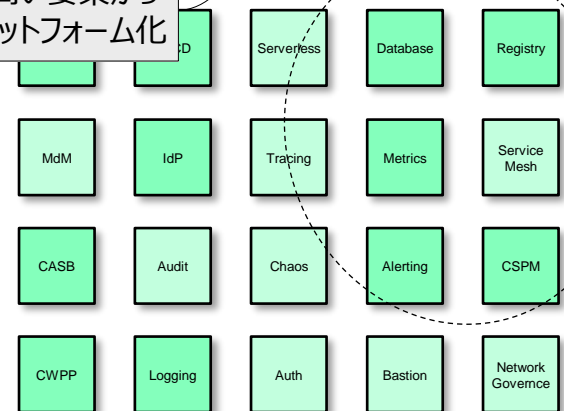
立ち上げ期



ファーストステップで目指すレベルとその構成要素を明らかに

拡大期

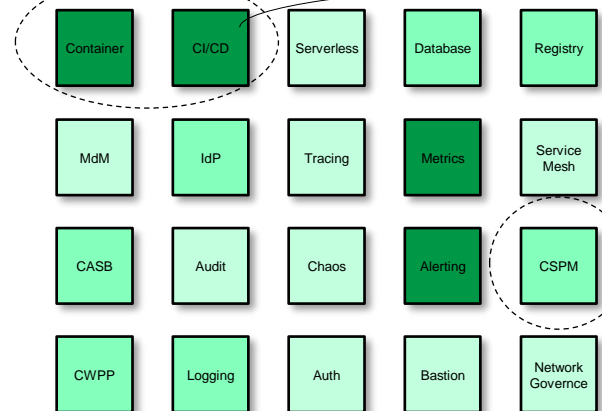
需要の高い要素から
共通プラットフォーム化



高いSLAのサービスの要求に合わせてサービス開発

成熟期

より高速にリフト&シフトできるように成熟した機能をサービス化



業務や共通的な需要によりサービス拡充

サービス化が難しくSREによる導入が継続する機能も部分的にはあり

凡例

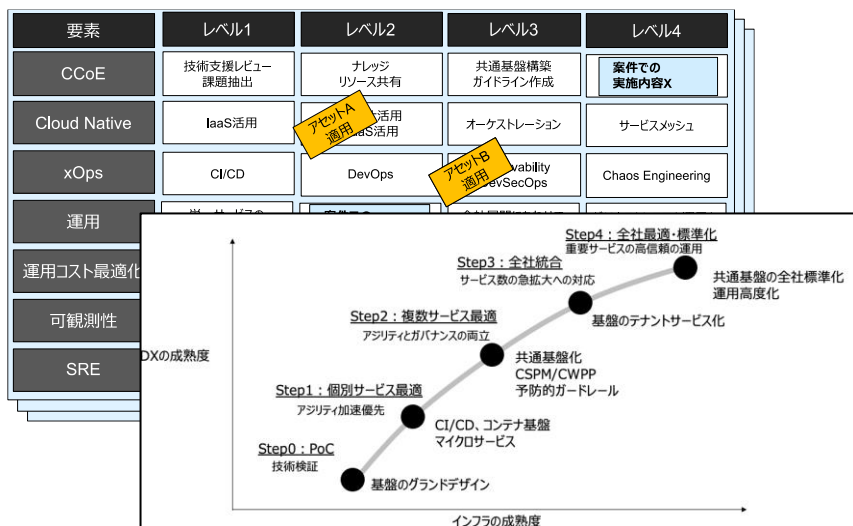
	Lv.0: 未計画		Lv.1: ロードマップ化済		Lv.2: 特定サービスに導入		Lv.3: 複数サービスに導入され、ガイドライン整備完		Lv.4: セルフサービス化されている
--	-----------	--	----------------	--	-----------------	--	-----------------------------	--	---------------------

NTT DATAのアプローチ：伴走するSREチームがプラットフォームを磨き込み

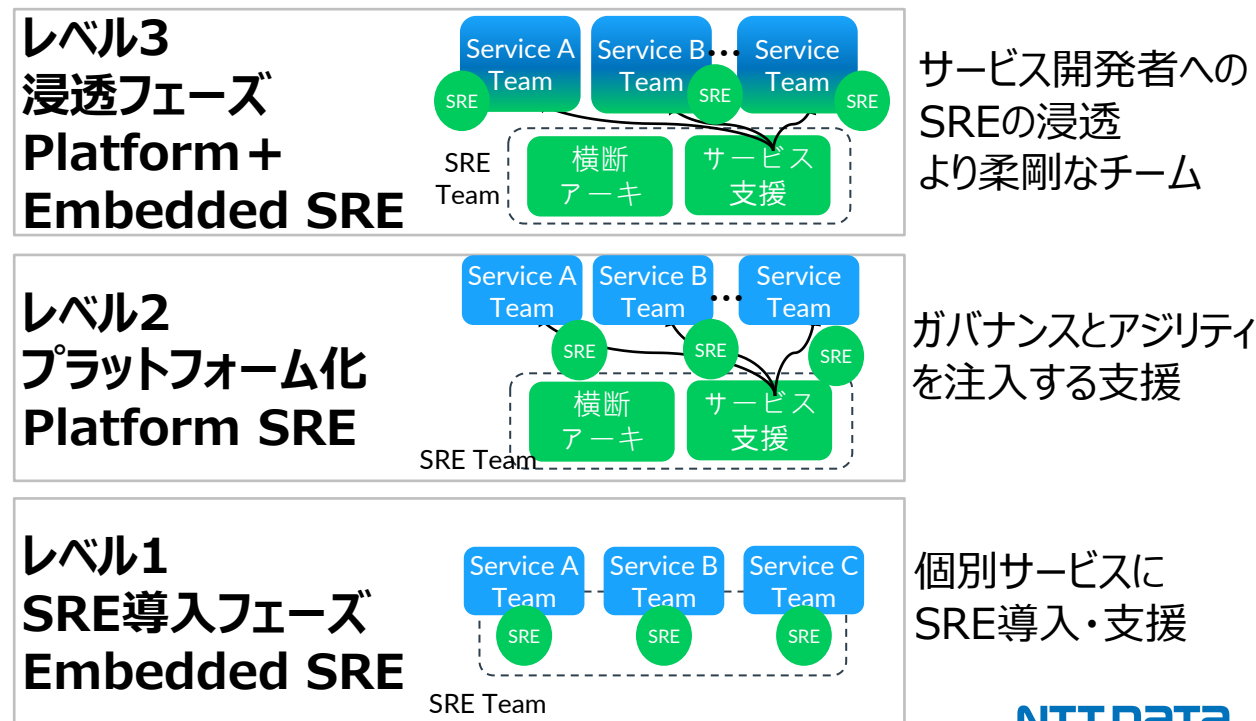
プラットフォームに伴走してSREチームが改善

- プラットフォームと実際に利用するサービスや開発者とのギャップを埋めるため、SREチームがサービスや開発チームと伴走し、成熟度やフェーズに合わせたプラットフォームの改善、進化に取り組む
- NTT DATAではそんなプラットフォームを支える伴走型のSRE組織を作るための事例やノウハウに加えて、SREとして活躍できる人財像の定義や育成プログラムの整備に取り組む。

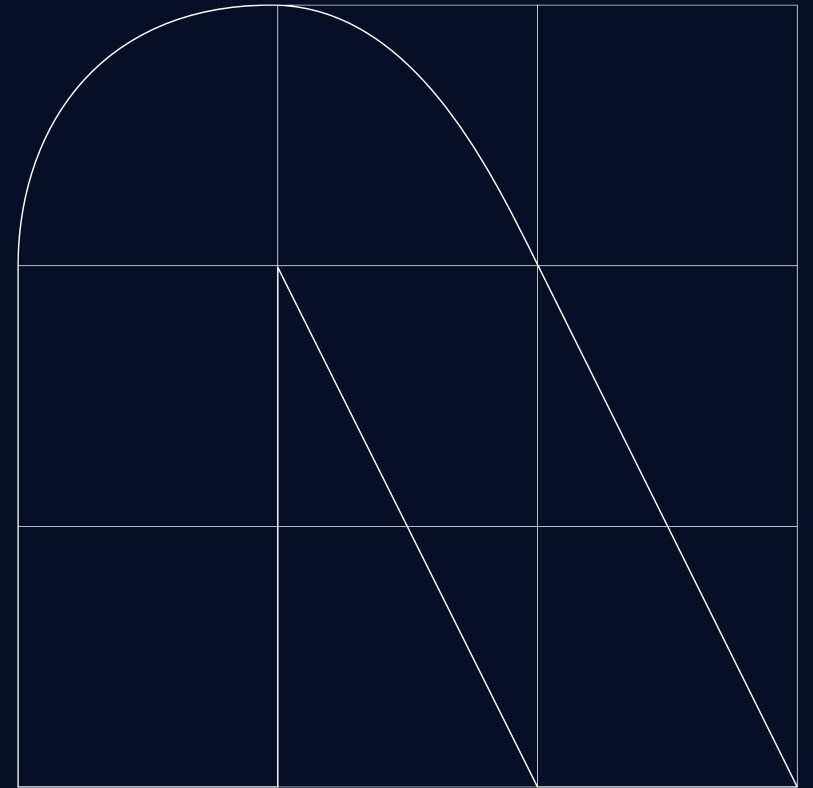
プラットフォームの成長ロードマップと構成要素



SREチームによるサービスチームとの伴走レベルと役割



まとめ



まとめ

NTTデータはSREに対応できる人財の拡大や、豊富な案件実績からの知見やノウハウをもとに、パートナーとしてクラウド基盤の価値の最大化を通じて、お客様のビジネスをサポートします！

クラウドやSREのお困りごとあればNTT DATAにご相談を！

NTT DATA